



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	A Study on Development of Plantation Agriculture : A Case Study of the Sri Lanka Tea Industry (STI)( 内容の要旨 )
Author(s)	HERATH, Suvineetha
Report No.(Doctoral Degree)	博士(農学) 甲第132号
Issue Date	1998-09-11
Type	博士論文
Version	
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/2473">http://hdl.handle.net/20.500.12099/2473</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

氏 名 (国籍)	Suvineetha Herath (スリランカ民主社会主義共和国)
学位の種類	博士(農学)
学位記番号	農博甲第132号
学位授与年月日	平成10年9月11日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科及び専攻	連合農学研究科 生物生産科学専攻
研究指導を受けた大学	岐阜大学
学位論文題目	A Study on Development of Plantation Agriculture: A Case Study of the Sri Lanka Tea Industry (STI)
審査委員	主査 岐阜大学教授 杉山道雄 副査 岐阜大学教授 小栗克之 副査 信州大学教授 野口俊邦 副査 静岡大学教授 小嶋睦雄 副査 岐阜大学助教授 荒幡克己

### 論文の内容の要旨

スリランカ茶産業 (STI) は、「セイロン紅茶」として著名なブランドを形成しており、スリランカ経済に重要な役割を果たしてきた。この経済的役割にもかかわらず、最近のスリランカ紅茶産業は著しい停滞を示している。この下降傾向は、プランテーションにおける低収量、高生産費と労働争議が原因であった。加えて、東アフリカなどの新興茶生産国が国際茶市場に参入して過剰生産傾向となり、これがスリランカ茶産業の高コスト、低生産性に益々追い打ちをかけた。

本研究は、なぜ STI が減少、衰退傾向にあるのか。その発展の方向は何であるかを検討することを課題としている。

本研究の目的は、STI が基本的にプランテーション農業 (PA) として展開していることから

- ① プランテーション農業の概念を検討し、スリランカにおけるプランテーション農業の特徴を明らかにすることである。
- ② さらにプランテーションの発展をもたらした過程を4期に分け、それぞれの制度的特徴を明らかにすること。とくに土地改革と民営化の意義と役割を明らかにすることである。
- ③ プランテーションは、生産、加工、流通、販売に分けられるが、そのそれぞれの特徴、すなわちアグリビジネスとしての性格を明らかにすることである。
- ④ 茶産業が国際的に展開していることから、国際 Food system としての性格を明らかに

することである。

以上の解明のため、1) プランテーションに関する内外の文献を収集し検討すると共にスリランカにおけるプランテーションの実態調査を行った。

1. プランテーションとは、従来の通説では「大規模面積における単一耕作 (Mono culture) で雇用労働依存の資本主義農場」と概念されるが、この概念では、今日の紅茶産業組織 (アグリビジネス) からみれば、その一端 (上流部) を示すにすぎない。今日のプランテーション農業は、単一耕作、大規模農場、雇用依存であるばかりでなく、フードシステムとしての生産、加工、流通、販売までを制御する多国籍企業 (MNCs) により管理されるものである。スリランカのいわゆるプランテーションの特徴は次の四点に要約できる。

1. 先進国ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地の一環として始まり、当初はコーヒー園であったが錆病の蔓延と共に茶栽培に転作し、50 万 ha にのぼった。
2. その対象作物は茶、ココア、ゴムの樹木産業 (Tree crop industries) であることは他のさとうきび産業と異なっている。
3. 独立後、土地改革 (1972-1975) を実施し国有化 (Nationalization) し、国家プランテーション (SPC) とした。
4. 国有化後、さらに国際競争力強化のために民営化 (Privatization) し RPC とした。
5. 雇用労働力はインド、タミール人であり労働組織も大きい。

2. プランテーションの展開期は次の4段階に分けられる。1. イギリス植民地時代(1883-1947), 2. 独立期(1948-1971), 3. 土地改革期(1972-1991), 4. 民営化期(1992- )

イギリスは 1845 年コーヒープランテーションとして始めるがコーヒー錆病の蔓延ために全滅し、次第に茶生産に転換し、最盛期には 50 万 ha にのぼっている。独立後、経済の支柱として労働力の 40 %、GDP の 20 %、輸入額の 82 % を占める重要な産業となった。1972 年、第 1 次土地改革で国有化し、1975 年、外国会社所有地を国有化し、国家プランテーション会社 (SPC) としたが、経営状態は悪化した。そのため、443 の茶園を 22 の地域プランテーション会社 (RPC) に経営管理を委託したが、7 会社は外国系、15 の国内企業も外国資本参加が多くなり、いわゆる多国籍企業により管理されることとなった。

3. 国内のアグリビジネスとしての特徴をみるため生産、加工、販売の特徴を検討した。

茶収量は低い。耕地は分散し古い品種、老株が多いため、生産費 (COP) は高い。加工工場はあるが、第一次産品加工 Bulk が多く、CTC など第二次加工製品や最終製品が少ない。Bulk tea はコロomboマーケットへ 60 % 運ばれ、その価格は低い。したがって、SPA の生産するものは第一次産品までであり、フードシステムからみれば上流部にすぎない構造である。

4. 国際化している今日、国際フードシステムとしての茶株から紅茶カップまで Tea Bush Tea Cup Chain (TBTC) の観点から特徴をみれば、次のようにまとめられる。

STI は川上型産業にとどまりコロomboマーケットで分断されている。国際アグリビジネスとしてのブルックボンドやユニリーヴァーは川下型産業である。国際的過剰生産下、多様な消費市場を目指して、フードシステムの川下化が起きている。そのような状況の下で、

この両者の関係は少なく、効率的、低コスト性を全体としてもっているとはいいがたい。

以上の分析によって、プランテーションは、旧来のプランテーションの概念から、アグリビジネスやフードシステムの視点を取り入れた、先に述べた概念とすることが必要である。

STI は Plantation として典型的川上産業であるが、川下の再加工やブレンドを行い、茶工場へスモールホルダーの生産物を組み入れる。なぜなら、小生産者は国際的に生産性は高く、これを内外での製茶工場に集約することができるからである。川下型茶工場でブレンド化し、高品質商品を作り出すこと。さらに川上、川下の経営連携を強めること。消費動向をつかみ、川上、川下の統一的ネットワークをつくることが一層重要となってくるだろう。

## 審 査 結 果 の 要 旨

プランテーションとは、植民地における先進資本主義国の現地住民雇用による大規模資本主義的農場で、単一耕作による第一次産品の輸出を主たる目的としていた。

従来のプランテーション研究のほとんどは、こうした認識の延長としてのものであった。

これに対して、本研究ではこれらの経緯をふまえつつ、今日的視点に立って、アグリビジネスとしての視点やフードシステムの観点など斬新な接近方法により、プランテーションを捉え直したところに特徴がある。

本研究は、第1にスリランカの紅茶産業プランテーション（SPA）をとりあげ、その特徴を明確にしたことである。

1) スリランカのプランテーションの特徴を次の5点にまとめている。

- ①先進国、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地の一貫として始まり、当初はコーヒー園であったが、錆病の蔓延と共に茶栽培に転換し、50万 ha に及んだこと
  - ②その対象作物は茶、ココア、ゴム等の樹木作産業（Tree crop industries）であり、さとうきびなどと異なること
  - ③独立後、土地改革を実施し、国有化（Nationalization）したこと
  - ④国有化後、国際競争力強化のため民営化（Privatization）したこと
  - ⑤雇用労働力はインド、タミール人であり、労働組織も大きい
- の5点を明らかにした。

2) SPA の変遷過程は、植民地期、独立期、土地改革期、民営化期の4期であるが、その最終段階で今迄のプランテーション農業（PA）からプランテーション産業（PI）になることを明らかにした。

SPA の展開過程で依然としてプランテーション用地を国有化としているがこれは、外国資本（MNCs）に土地流出を防ぐこと、労働者の雇用の拡大を

行うこと、及び、国際競争力強化のためのアグリビジネス化であった。この時点でスリランカ紅茶産業（STI）となる。

- 3) この STI をアグリビジネスとしてみた場合、上流部（生産）、下流部（加工、販売）と分けられるが、生産面では茶収量が少なく、耕地が分散し、古い品種、古株が多いため生産費（COP）は高い。つまりプランテーションはアグリビジネスの上流部に位置するにすぎない。
- 4) 国際化している今日、国際フードシステムとして茶株から紅茶カップまで（Tea Bush・Tea Cup chain）＝（TBTC）の観点からみると、STI は川上型産業にとどまり、原料 Bulk tea をコロンボマーケットに出荷するが、ここで TBTC は分断されている。国際アグリビジネスとしてのブルックバンドやユニリーヴァーは川下型産業である。ここで上流と下流のビジネスリンクエージが課題となる。

以上の4方向からの分析を通じて、STI は協同組合型でもコントラクトタイプでなく、直営型の会社型として位置づけられる。

今後、STI は川下の加工やブレンドを行い、茶工場へのスモールホルダーの生産物を組み入れるべきであることを提言している。なぜなら、小生産者の生産性は国際的レベルであることが本研究で明らかにされたからである。

以上について審査委員全員一致で本論文が岐阜大学連合農学研究科の学位論文として十分価値のあるものと認めた。

基礎となる学術論文の発表学会誌は以下のとおりである。

- 1) Consequence of the Policy Changes on the Plantation Agriculture - A case study of the Sri Lanka Tea Industry (STI) 農業経営研究 (36-2) 1998. 9
- 2) 茶プランテーションの土地改革と民営化の性格と課題 - スリランカにおける事例分析 農業市場研究 (7-1) 1998. 9